

どこでも
だれでも

手軽にできる

野菜の袋栽培

改訂版

第3回 春から袋で野菜を育ててみよう



京都教育大学名誉教授
農学博士

やな がわ だし
梁川 正

環境教育実践センターにおいて、野菜や花き、食用作物などの栽培指導のほか、栽培植物の残渣を堆肥化して「食の循環の教育」の指導を実施、研究面では、球根花きやラン類などの組織培養によるウイルスフリー化や増殖、無菌培養の簡便化に関する研究を推進。退職後は、袋で簡単に栽培を楽しむ方法や簡便に無菌で培養して楽しむ方法、植物を育てる活動の大切さの普及に努めている。

第1表 袋栽培ができる春からのおすすめ野菜

タネから育てる野菜	ポリ鉢にタネをまいて育てた苗を袋に定植	3～4月タネまき、自分で育苗可、4～5月定植、1～2鉢/袋 →初夏～秋に収穫	ミニトマト、ナス、ピーマン、キュウリ、ニガウリ、スイカ、カボチャ、トウガン、ズッキーニ、スイートコーン、オクラ、ラッカセイ、ツルムラサキ
		4～5月タネまき、自分で育苗可、5～6月定植、2～3鉢/袋 →初夏～秋に収穫	バジル、シソ、モロヘイヤ、エダマメ
苗や種イモから育てる野菜	袋に苗や種イモを定植	5～7月に定植、1苗/袋→10月に収穫	苗：サツマイモ
		2～3月に定植、1～2個/袋→6～7月に収穫	種イモ：ジャガイモ（春作品種：男爵など）
		4～5月に定植、1個/袋→10～11月に収穫	種イモ：サトイモ、ヤマイモ

第2表 袋栽培で育てる野菜のタネ（品種）を選ぶ際のポイント

品種を選ぶポイント	確認ポイント
①病虫害に対する耐病性 ②タネまき時期（春まき、秋まき）・収穫時期 ③早生品種か中生品種か、晩生品種か ④野菜の形や性質	・病虫害に強い品種 ・自分の住んでいる地域に合う春まきに適する品種 ・できれば、早生の品種 ・育てようとする野菜の形や大きさ、色などを考える

第3表 袋栽培で育てる野菜の苗や種イモを購入する際のポイント

苗や種イモの特徴など	気をつけるポイントとおすすめ
①春から栽培する野菜は寒さに弱い ②病虫害に強い品種を確認する ③苗の生育状態を確認する ④種イモなどは販売時期に合わせる	・袋栽培を始める時期を考える。 ・3月下旬～4月下旬ごろ開始（関東、関西）→霜よけ対策が必要 ・5月上旬から開始→露地で栽培可能 ・病虫害に強い品種。できれば、病害虫に強い接ぎ木苗を選ぶ ・葉の色が濃く、茎が太く、がっちりとした苗を選ぶ ・ジャガイモ種イモ、サトイモ種イモ、サツマイモ苗を準備

春から育てる袋栽培向けのおすすめ野菜には、タネをまいて育てた苗を袋に定植する野菜、袋に苗や種イモを定植して栽培開始する野菜があります（第1表）。
どのような野菜を栽培するか、どこに袋を置いて栽培するかを考えて、適切な容量の培養土と袋を準備します（連載第1回参照）。そして、栽培しようとするタネや苗などを準備し、背が高くなる果菜では支柱を準備します。
袋に植え付ける苗は、自分でタネをまいて苗を育てるか、園芸店などで苗を購入します。同じ野菜でも、多くの品種があり、タネの袋には、それぞれ

の地域によるタネまき時期や品種の特徴などが書いてあります。お店の方に おすすめを聞いてみたり、園芸店やホームセンター、種苗会社などのネット通販で選びましょう（第2、3表）。
春からの袋栽培の水やりは、定植後、毎日観察して、表面の土が乾いていたら、午前中の9～10時ごろに、袋の中に水がほば行き渡るようにたっぷり与えるのが原則です。5～10月くらいまでは、晴天で高温乾燥の日になると、朝に水を十分に与えても夕方には袋の表面の土が乾いてくることが多いので、その場合には夕方にも水をたっぷり与えます。

春から育てる
おすすめの野菜

ミニトマト（ナス科）

ポリ鉢で育てられたミニトマトの苗は、本葉が5枚以上に展開したところ、1袋に1本の苗を植え付けます。植え付けから2～3週間経って、茎がかなり伸びてきたら、支柱を立てます。
ミニトマトでは、茎や葉を作る栄養生長と、花や果実をつける生殖生長が同時に行われます。主茎の成長点は、本葉を8枚ほど形成した後に、果実となる第1花房（トマト）が最初につける



← ミニトマトの袋栽培。各節のわき芽は早めに切除する。



↑ 袋栽培はスペースの確保が難しい幼稚園などでも、教材として活用できる。子どもたちは普段食べているミニトマトが、どうやってできるのかに興味津々。

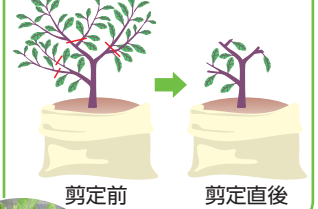
花房）ができ、その後、3葉ごとに花房を次々につけていきます。つまり、第1花房より上は、本葉と花房が、葉↓葉↓花房↓葉↓葉↓葉↓花房というように規則的につき、果実が同じ側にできています。さらに生長するにしたがって、葉の付け根にわき芽が出てきます。花房をつけるまでの1〜7枚目の葉と花をつけてから、3枚ごとに出てくる葉の1〜2枚目の葉のわき芽は、あまり伸びないうちにすべて摘み取ることがポイントです。

わき芽を摘み取らずにそのままにしていると、栄養がわき芽の生長に使われ、ミニトマトの果実の生長が遅れるのでわき芽の摘み取りがとても大切ですよ。

ミニトマトは開花後40〜50日で着色が始まり、50〜60日で成熟します。果実が赤く熟したものから順に、こまめに収穫してください。収穫はヘタの部分（せんてい）を剪定バサミで切り取ります。

第1図 ナスの更新剪定

— 剪定位置の例



ナス（ナス科）



← ナスの袋栽培の様子。葉が大きくなりしおれやすいので乾燥に注意し、株が大きくなったら、たっぷり水を与える。

ナスは、地方ごとに特有の品種が古くから栽培されてきました。ナスの場合も、果実がつく位置はミニトマト同様規則的で、葉が2枚出るとに花が形成されて果実ができてきます。

ポリ鉢で育苗された苗が、葉を5枚



キュウリ（ウリ科）

キュウリは、つる性の茎を伸ばして生長します。緑のカーテンに使うこともできます。

ポリ鉢で育苗されたキュウリの苗は、葉が5枚以上展開してきたら、1袋に1本の苗を深植えにならないように、植え付けます。茎がつる状に伸びて巻きひげが出てくるころまでに、支柱を立てます。キュウリは、花が咲いてから果実をつけるまでの日数が大変短く、花が散り、数日経つと小さなキュウリとなります。

以上展開して育ってきたら、1袋に1本の苗を深植えにならないようにして植え付けます。

定植したナスは、5月下旬ごろから1番花が咲き始めます。このころまでには、支柱立てを済ませておきます。そして、6〜7月にかけて次々と花を咲かせて大きく生長。ナスは肥料をたくさん吸収しますので、肥料を切らないように十分に与えます。袋栽培では主茎と、1番花のすぐ下の側枝と、その下の側枝の計3本の枝を残し、それらより下の側芽は早めに摘み取って、3本仕立てとします。

収穫には剪定バサミを使います。生長した株は、枝の生長とともに果実も

支柱に誘引して、生長してきた主茎のつる（親づる）の下からおおよそ5節目ぐらいまでの雌花と節から出てくる側枝（子づる）は早めに摘み取ります。

これは、あまり下の節からキュウリをならせて下の節からの子づるを生長させると、株に負担がかかって収量の低下を引き起こすので、それを防止するためにを行います。

雌花開花後の果実肥大の様子を毎日観察していると、5〜6日目ごろから果実の肥大が急激に進みます。10日目ごろから肥大はゆるやかになることが分かります。夜間の生長量は大きく、

次々につけて大きくなります。1番目の果実をいつまでも枝につけたままにしておくと、枝に栄養分が行かなくなり、その後の草勢が衰えてしまいます。2番目の果実以後は、果実の生長を毎日観察しながら、少し小さいうちに収穫する方が、より多くのナスを収穫できます。

8月になって、暑さで株の勢いが弱ってきたころ（8月上旬ごろ）に、収穫を休んで、新しい枝を出させるために、第1図のように思い切って枝を切り落とします（更新剪定）。枝を切り落として剪定をした後、有機配合肥料などを1袋当たり約30g与えて、草勢の回復をはかり、9月から秋ナスを収穫します。

一晩で3cmも肥大することがあります。開花後10日程度で収穫できますが、収穫が遅れると、果実が大きくなりすぎるので、早めに収穫するようにします。

「キュウリってトゲトゲしてる…」と果実の触感を学ぶ子どもたち。



↑ 「キュウリってトゲトゲしてる…」と果実の触感を学ぶ子どもたち。

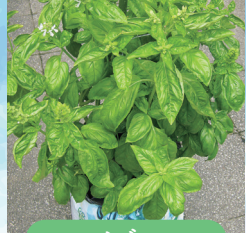


→ キュウリの袋栽培。果実が大きくなりすぎる前に収穫を。

ご紹介した種類以外にも、袋で育てられる野菜がたくさんあります！



ピーマン



バジル



サトイモ

スイートコーン(イネ科)

スイートコーンの花はウリ科の雄花、雌花とは異なり、雄穂と果実になる雌穂が別々のところにでき、風媒で受粉します。また、別の品種の花粉が雌穂に付いて受粉すると、キセニア現象によって果実の品質低下が起こるので、同じ品種のみを栽培してください。

スイートコーンのタネまきから収穫までの期間は、早生種では80日程度、晩生種では100日程度です。4月中旬ごろにポリ鉢にタネまきして発芽させた苗は、本葉が4〜5枚展開したところに、1袋に2本の苗を植え付けます。スイートコーンは他株の花粉で受粉する場合が多く、10本以上育てないと受精しにくいと言われていますので、1袋に2本植える袋を2袋以上準備して、並べて栽培することをおすすめします。

植え付け後のスイートコーンの生長は早く、次々に葉を大きく展開していきます。主茎が葉を15枚前後展開して、先端に雄穂が見られるころまでには、支柱を立てます。地際の節から側芽が伸びて生長し、基部分枝(分けつ)が見られます。これらは株の倒伏防止と収量増加につながりますので、取らずにそのまま残しておきます。

雌穂が出現してきたら、1株につき最上の位置の雌穂を1つだけ残し、鳥

よけのネット袋をつけます。それ以外の下の雌穂は、絹糸が出てきたときに、主茎の葉を傷付けないように注意して

取り、ヤングコーンとして利用します。スイートコーンのいわゆる「もぎたてのおいしさ」を味わうためには、適

期に収穫してできるだけ早く食べることで。早生の品種であれば絹糸(す

べての粒につながる柱頭)が出てきて20日目ごろが収穫適期です。絹糸の褐

変と日数を確認して、果実の先端部の粒(苞葉)を少し剥いで、先端部分の粒

が黄色くなりかかっているれば、収穫適期であると判断できます。スイートコ

ーンは収穫後、急速に糖分が減少します。しかも、貯蔵温度が高いほどその

減少速度は速く、味が著しく低下しますので、植物体の温度が上がらない朝

のうちに収穫して、すぐにゆでたり焼いたりして食べるか、冷蔵庫内に貯蔵

してその日のうちに食べてください。



↑スイートコーンは1袋に2本植えし、2袋以上並べて栽培したほうが受粉しやすい。

サツマイモ(ヒルガオ科)

サツマイモは、茎(つる)を伸ばして生長し、根が太ってサツマイモになり、甘藷(かんしよ)と呼ばれる。皮やイモの色、甘みの程度に違いがあって多くの品種があります。

サツマイモの苗は園芸店やホームセンター、JAなどで販売されています。茎がしっかりと立っていて太く、長さは30cmぐらい、葉は元気で枯れた葉が少ない、節と節の間が詰まっている、よい苗を選びます。

5月中旬ごろに、入手したサツマイモの苗が30cmぐらいと長い場合は、茎を船の底のようにやや湾曲させて、1袋に1本の苗を植え付けます。サツマイモの茎の節の部分に形成される根が太ってサツマイモになるので、節の部分を4つぐらい地下に埋め込むような形で、茎を湾曲させて植え付けます(第2図・船底植え)。

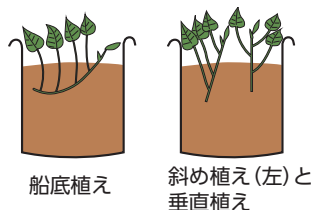
短い茎の苗しかない場合には、1袋に2本の苗を斜めか垂直にし、挿すように植え付けます。斜め植えや垂直植えの場合、地下に埋められる節の部分は2つぐらいなので、2本の苗を植えて、地下に潜らせる節の部分を増やして収穫できる量を確保します。5月に植えて伸びてきた茎を7月上旬ごろまでに20cmぐらいに切って苗とし、別の

袋に斜め植えや垂直植えで栽培することもできます。

肥料が多すぎると、つるや葉が繁りすぎてサツマイモのつきが悪くなります。この状態を「つるばけ」と言います。逆に肥料が切れると、収穫時期を迎える前に葉が弱ってサツマイモの太りが悪くなるので気を付けます。草木灰があれば、葉を持ち上げて株元にひとつかみまき、軽く土と混ぜ合わせて追肥します。

10月中旬を過ぎたら収穫時期です。株元から5〜10cm上のところでつるを剪定バサミで切り、サツマイモを傷付けないように移植ゴテで株のまわりを掘り起こし、土をやわらかくしてから根元を引き抜いてサツマイモを掘り上げます。掘り上げたサツマイモは土の上で1時間ほど日に当てて表面を乾燥させると保存性が高まります。

第2図 サツマイモの植え方



→
麻製のコーヒー豆の袋で栽培したサツマイモ。肥料袋や土壌袋などでも代用できる。

